

神たちに宇氣比まをしたりし、かひ有げなりとて、さし出し給ふに、まづ打おどろきつゝ、もて退きて讀見るに、既に請まをせる古書どもに、こゝら記せる神代の事蹟の、まことまがひを撰りわきて、其正説をまさごと、文成し給へる一部は、すなはちこの古史成文、しか撰りとり給へるこゝとわりを、徴し給へる一部は、すなはちこの卷より次々の徴なりけり、また靈眞柱タマシノイハシといふをさへに著はして、道のおくかを示し給ふ、略中

文政二己卯年四月

駿河國府人新庄仁右衛門道雄

〔名物六帖人事四〕失寐チヨチ心驚チヨチ通夜失寐チヨチ
槌當時以爲笑樂 寢不寐左傳

失寐チヨチ復失寐チヨチ加チヨチ以チヨチ低睡チヨチ帝詩嘲チヨチ之曰チヨチ狀若チヨチ喪家狗チヨチ又似チヨチ懸風チヨチ

〔關の秋風〕此頃は、夜はごとにいねず、さまざまにねまほしく思ふほど、かねの音をかぞへ、鳥の聲をき、笥の音もうるさくて、しばし目をとちて見れども、夢みんやうもなし、かくねまほしくおもふ程ねられねば、よしひとよはおきて明さばやと思ひきりても、兎角ねまほしき心のみわすられず、ほどちかきあたりに、いねし人も、今や夢など見るらんとおもへば、いとゞむねくるし、さらばよその事を思ひ出だしまぎれんと、心にもあらず、をかしき事、たのしき事など思ひみれど、いつかうちわすれて、夢をばいつか見んとのみ思ふなり、夜もや、更け行けば、いとゞさびしくて、こしかた行く末の事など思ひつゞけ、あるは心くるしき事など、かうがへて夢もみつかず、せん方なくて、くすしにとひければ、只物をふかくかうがへて、心を勞し侍る事のなきやうにと諫む、されど短才重任、いかでかうがへ侍る事なくてありなん、略下

〔倭訓栞前編 二十〕ねおびれ。源氏に、わか君のねおびれてなきたまふと見えたり、夜啼客忤をいふ也。

〔倭訓栞中編 十八〕ねおびれ。寐ほれたるをいふ也、又ねおびれの略成べし。